

目的 学校教育のあり方が社会的に注目を集めている現在、児童・生徒の家庭生活経験と母親の対応について調べ、その実態から家庭科のあり方について検討することを目的とした。家庭生活に必要な知識・技能の習得のためには、家庭教育と家庭科の相互関係は深く、両者のバランスは児童・生徒の生活経験および能力に影響を及ぼすことはいうまでもないが、その両者の関係を児童・生徒側の調査から分析を行った。

方法 本研究を実施するにあたり、調査対象校としては大阪府下の1高校を選定し、その校区の中学校・小学校とした。高校1年生、中学1年生、小学6年生、小学4年生に調査を行った。調査は昭和59年6月、学校配布留置法による質問紙法をとった。調査項目は児童・生徒の家庭における生活経験に関することと、それに対する母親の姿勢を子どもから問うたものである。また、母親の家事処理能力と児童・生徒との関係もみた。

結果 児童・生徒の家庭生活経験をみると、個人生活に関する事項についての経験度は高いが、家族全体にかかわることについては低く、女子は学年進行にともない家庭生活経験度は上昇し、男子は逆に低下する傾向がみられた。特に男子高校生の家庭生活経験の低さが関心をもちない原因となっているので、家族の一員としての帰属意識をもたせ、家庭生活に必要な知識や技術を学習することで、生活の主体者としての能力育成が必要と考える。家庭生活経験のうち、消費者として購買行為などはよく行われていすが、経験を能力にまで育てる学習場が必要で、家庭科の役割が大きいことを確認できた。母親は女子には積極的に指導しているが、母親の生活態度と子どもの生活経験との関係は大きいのである。